

## 第三セッション「〈物語〉」2012——語り・絵・『源氏物語』総括

小嶋 菜温子

第三セッションのテーマは、物語と絵画の相互関係を問うことを主眼として、とくに『源氏物語』に焦点をしぼる議論を目論んだ。二〇一二年を謳ったのは理由がある。前年の二〇一一年に、パリINALCOで開催予定であった国際シンポジウム「物語の言語——時代を超えて」が、東日本大震災と福島第一原発事故のあおりで縮小開催を余儀なくされる事態となった。同シンポジウムに参加予定であった土方洋一氏・長島弘明氏・小嶋も参加を取りやめ、紙上参加の形を取らざるをえなくなったのであった。そのことを惜しみ、INALCOでのシンポ責任者でいらした寺田澄江先生にも呼びかけて、今回のシンポ開催となった次第である(二〇一一年のパリでのシンポの成果は、『物語の言語——時代を超えて』寺田澄江・小嶋菜温子・土方洋一編、青簡社、二〇一三)。

報告①は、土方洋一氏(青山学院大学教授)「『源氏物語』の絵画的場面をめぐる」。 「絵になる場面」を物語がどう語るかという観点から、語りにおける空間性の意味を問いなおそうとした。「出来事やストーリーから産出される意味とは性格の異なる、抒情的、静止的なものの中から生まれてくるなにか」を、あらたに言語化することの必要性を説くものとして刺激的であった。報告②は、長島弘明氏(東京大学大学院教授)「『源氏物語』と『雨月物語』」。長島氏は、『雨月物語』における『源氏物語』享受の様相を、時間的・空間的に精緻に読み解いた。土方氏の論とは異なる視点からの、物語の表現性への肉薄に教えられるところ大で

あった。報告③は、佐野みどり氏(学習院大学教授)「イメージの往還——響き・揺らぎ・拓き」。佐野氏の報告は絵画から物語への接近を試みるもので、土方・長島両氏の報告をつなぐ役割も負うものであった。源氏絵の多様性を、様式論を軸に多面的に解析する点で、きわめて有意義な報告であった。

以上の三氏による報告をもとに、コメント①として陣野英則氏(早稲田大学准教授)が、コメント②として、寺田澄江氏(INALCO教授)がそれぞれ鋭い指摘を重ねて、議論を活発化させた。陣野氏と寺田氏のコメントによって、語りと絵画の往還の有用性がさらに認識されることとなり、本セッションが企図したテーマの重要性をより明確にすることができた。各位に心から感謝申し上げます。